

(1) 挨拶

皆さん、お早うございます。

このたび、第五世代コンピュータ国際会議を開催いたしましたところ、世界各国および国内各方面から、多数の方々のご参加を賜り誠にありがとうございます。また、通商産業省から倉田政務次官、榎橋機械情報産業局長、情報産業振興議員連盟から倉成会長を始め、各界から多数のご来賓の方々の臨席を賜り、厚くお礼申し上げます。

始めに、この第五世代コンピュータの研究開発の過程を振り返りますと、ちょうど7年前の1981年10月に初めて日本の第五世代コンピュータの実現のための研究課題および計画が公表され、「第五世代コンピュータ国際会議1981」が開催されました。

この国際会議を踏まえ、1982年4月に通商産業省は官界、学界、産業界の幅広い関係各方面の協力なご支援、ご協力の基に10年計画の第五世代コンピュータ・プロジェクトを開始し、当機構が推進の中核を担うこととなりました。

1984年11月には、第2回の国際会議として、1982年からのプロジェクトの前期3ヵ年の基礎技術の研究成果を報告するため「第五世代コンピュータ国際会議1984」を開催しました。

今回の国際会議は、中期計画4年目の最終年度に当り第3回目の開催となるわけです。

中期の研究開発の中心課題は、これまで世界的にも本格的に試みられたことがなかった並列処理に挑戦するための土台を築くことであり、また、推論をベースとして知的なソフトウェアを組み上げるためのソフトウェア技術を蓄積す

財団法人 新世代コンピュータ技術開発機構
理事長 三田 勝茂

ることも重要な課題であります。並列処理技術については、まず、ハードウェアとして、64台のプロセッサを接続した並列推論マシン実験機が完成し、その上で、並列ソフトウェアの核となる並列オペレーティングシステムの試作版が稼動を開始しています。

ハードウェアに関しては、より高性能の128台のプロセッサからなる並列推論のマシンの試作も進行中であり、当初目標を、殆ど達成しています。

知的なソフトウェアに関しては、自然言語理解システムや、各種のエキスパートシステム、また、定理証明などの数学的処理を行うシステムなど、多くのものが開発されています。

この度は、これらの中期的研究成果を、直接皆さんにご覧頂きたいと考えまして、30件余りをデモンストレーションで紹介することにしております。

来年度から始まる後期計画においては、1000台規模のプロセッサからなる第五世代コンピュータプロトタイプの研究開発と、これを制御する本格的な並列オペレーティングシステム、これらを利用するための知識プログラミングシステムなどが、研究開発目標として設定されております。

さて、当機構の研究体制ですが、ICOTの研究所は、国の研究機関、およびコンピュータ・メーカ各社等から出向している約100名の若き研究員で構成されており、当プロジェクトの実施に際しては関係業界、関係団体多数研究者の協力も得て、研究開発を推進しております。

又、研究開発の進め方については、アドバイザリ・グループとして官界、学界、産業界の各方面の専門家の方々にご参加をいただき、その指導をあおいでおります。

予算面におきましては、通商産業省の委託を受けて、前期3年間では合計82億円の予算で研究開発を実施いたしました。

中期については1985年約47億円、1986年約55億円、1987年56億円、1988年約57億円、中期合計215億円の予算で研究開発を実施しております。

他方海外におきましては、欧米主要国でも、第五世代コンピュータ技術の確立を目指して政府主導でプロジェクトを協力を推進しつつあり、ICOTでも国際学会での発表等、国際的な研究交流を重視しておりまして、海外の長期派遣研究者の受入れを含め、積極的な研究交流を進めております。

今回は、中期の研究成果を報告すると共に、併せて内外の関連研究者による研究発表と、相互の意見交換を行うことを目的として、国際会議を開催することといたしました。

開催にあたりましては、相磯秀夫実行委員長、田中英彦プログラム委員長をはじめ、実行委員会および各委員会委員各位の献身的なご尽力を賜りましたのでここに厚くお礼申し上げます。また、本会議の開催に対する、関係の諸学会および諸団体の方々のご支援にも深く感謝したいと思います。

今回の国際会議には、多数の方々のご参加をいただき参加者の方々のご協力と活発な意見交換を通じまして、実り豊かな国際会議となり、後期のトータルシステムの開発へ向けて確実に前進するとともに、世界各国における情報処理の技術の発展に大きく貢献することを念願しまして開会の挨拶といたします。

ご静聴ありがとうございました。